

第4部 研究Ⅱ－B 義務教育後の実例

1 調査対象事例について

本研究の調査は、平成20年度千葉県訪問相談担当教員により、半構造化面接^{*1}の形で実施した。なお、ここで取り上げた実例については、個人が特定されることのないよう、その本質を損なわない限りにおいて、適宜改変してある。

(1) 調査対象

聞き取り調査の対象は、中学生時に不登校だった生徒及び登校しぶりがみられた生徒の中学在籍時及び卒業後の様子を知る本人または関係者とした。

聞き取り対象者の具体的な立場は、中学生時に不登校傾向がみられた生徒本人及び母親を対象にしたものが6事例、教育支援センター職員（市指導主事を含む）を対象にしたものが7事例、中学校養護教諭を対象にしたものが4事例、中学校学年主任を対象にしたものが2事例、中学校担任を対象にしたものが1事例、訪問相談担当教員を対象にしたものが1事例、市家庭児童相談員を対象にしたものが1事例、中核地域支援センターコーディネーターを対象にしたもの1事例であった。

(2) 調査の内容

今回の「実例」は、不登校であった生徒及び登校しぶりだった生徒が、中学校卒業後にどのような進路を選択し、その後どのような状況で生活しているのかを調査したものである。聞き取り内容の子どもの調査当時の年齢は15才から21才までであった。特に、高校進学や就職などで集団に適応するのに苦労しているケースを中心に集めたものである。そのため、高校へ進学したが進路変更をしていたり、家庭要因を抱えた事例が多くなっている。また、聞き取り内容の子どもは、平成19年度以前の卒業生も含めているため、研究Ⅰで対象とした子どもとは限らない。

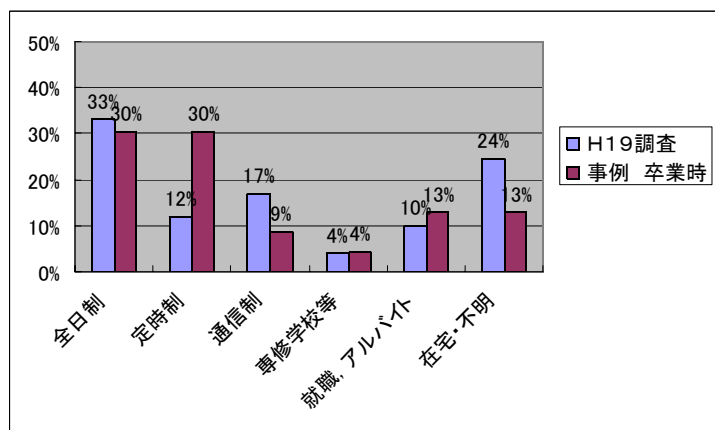
半構造化面接の質問項目については、「第1部 研究の概要」を参照されたい。

2 「実例」の概要

(1) 進路決定

進路について、平成19年度不登校支援推進校を対象に実施した調査（以下、「平成19年度調査」）結果と比較したところ、全体的には平成19年度調査と同じような傾向を示しているが、今回調査の「実例」の方が「定時制進学」の割合が高く、「在宅」や「不明」が少ない。全日制高

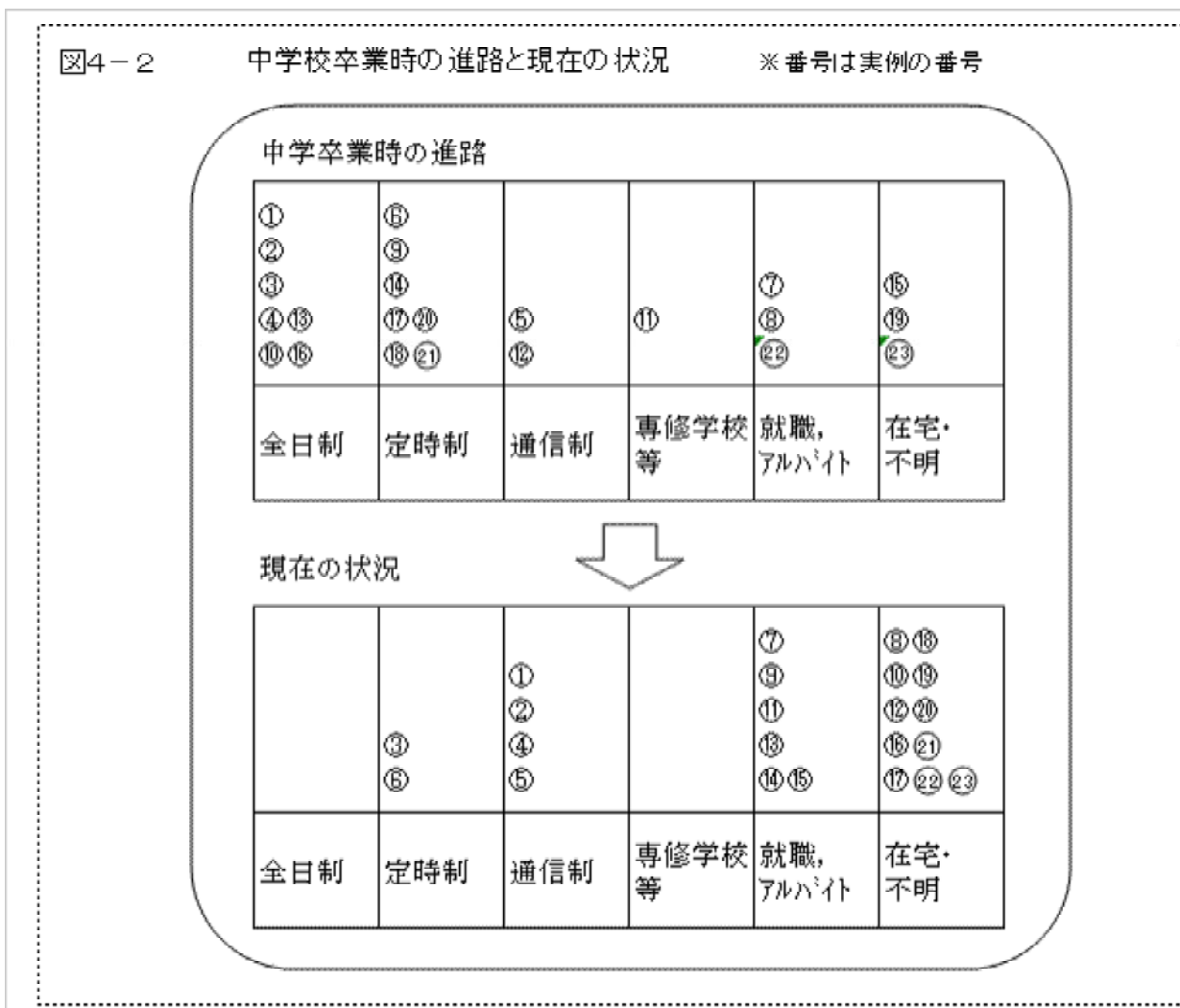
図4-1 不登校生徒の卒業後の進路



*1「被面接者に自由に語ってもらう形ではあるものの、同時にこちらの設定した諸項目について聞き取るという穏やかな枠組みを持った面接を反構造化面接と呼ぶ。」保坂，中澤，大野木（2000）

等学校から専修学校まで含めた進学率は、「平成 19 年度調査」が 65.2 %で、今回調査の「実例」が 73.9 %と、「実例」の方が 8.7 %高かった（図 4 - 1）。

しかし、「実例」の進学者のうち、17 事例中 15 事例で進路変更がなされ、特に、進学して 1・2 年後の在学率は、26.0 %と、大幅に数値が下がり、逆に「在宅」「不明」のケースが大幅に増加した（図 4 - 2）。



(2) 欠席状況

表 4 - 1 は、実例の対象者の年間欠席日数を表したものである。「実例」の年間欠席日数については、19 年度調査同様に二極化の傾向がみられた。また、詳しく出欠席の状況を聞くと、「出席はしているがほとんどが保健室や別室登校であるケース」や、「ほぼ毎日、教育支援センターに通っているが、出席扱いにしていないケース」、「日課の一部しか参加していないケース」、「入院中で院内学級に通っているケース」等、それぞれの学校で様々な実態に合わせた処理が行われていた。

表 4 - 1 「実例」の年間欠席日数

	30日 未満	49日 以下	69日 以下	89日 以下	109日 以下	119日 以下	139日 以下	159日 以下	179日 以下	199日 以下	不明
「実例」の件数	2	3	4	2	2	0	0	0	1	5	3

(3) 家庭環境

「実例」の中から読み取れる範囲で、「家族関係が複雑なケースや親が健康でないケース」が 10 事例、「経済的に苦勞している家庭のケース」が 7 事例、「親が子どもにとって十分な支援者になっていないケース」が 12 事例（延べ数）であった。

(4) 中学時代に受けていた支援

何らかの形で外部による支援を受けていたケースは 18 事例で、受けていないケースは 5 事例であった。支援を受けるにあたり利用した具体的な関係機関は、別室登校 4 件、スクールカウンセラー 1 件、教育支援センター 9 件、訪問相談担当教員 3 件、市福祉課・家庭相談員・福祉センター 3 件、主任児童委員 1 件、児童相談所 2 件、市指導主事 1 件、病院 4 件、その他警察等があげられた。

3 事例と考察

実例 1 普通高校から進路変更し、サポート校で適応できたケース

17歳（高3）の女子，両親・妹の4人家族

1 不登校のきっかけ，その当時の様子

中学校では，バスケット部に所属し熱心に参加していたが，友だちとのトラブルから学校を休んだことをきっかけとし，朝になると気持ちが悪くて起きあがることができなくなった。両親も心配して内科医や精神科医など数カ所の病院で診察を受けたが，好転はなかった。中3では，登校日の半分を欠席した。

2 中学校時の支援

担任はこまめに家庭訪問を続け，母親や本人との関わりを継続させた。また，部活動でトラブルのあった友だちとも仲直りし，本人ももう一度部活動に参加したいという気持ちが出てきて休日には部活動に参加でき，夏の大会にも出場した。

3 選択した進路と現在の状況

「普通高校に入学して，バスケットをしたり，友だちと楽しい高校生活を送りたい」という本人の希望もあり，私立高校普通科に進学。しかし，入学後も体調が回復せず，夏休み以降は友だちとの行き違いから家にひきこもるようになり，2学期末に退学した。最初に在学した高校では，話を聞いてもらえる雰囲気ではなく，このまま普通に通学できないなら，進路変更をするように勧められたことがショックであった。翌年の1月に，サポート校に週1回のペースを目標にして通い始めた。徐々に体調も回復し，友だちもできてきた。高3になり，毎日通学するようになってきている。また，アルバイトもしている。

4 卒業後の支援

サポート校では，先生方が熱心に話を聞いてくれたのでよかった。

5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）

中学校時に，担任は家庭訪問をこまめにして関係を継続してくれた。そのため，保護者や本人の心配や不安をやわらげることができた。

普通高校では，先生方に話を聞いてもらえる雰囲気がなく，進路変更を勧められた。親身になって悩みを聞いてもらえる先生がほしかった，と本人は言う。体調が悪かったが，病院の薬で気持ちも安定し，サポート校では話を聞いてもらい，自分に合った通学コースを選ぶことができた。

実例2 全日制高校退学後、小集団（通信制高校）で適応できたケース

18才（高3）の男子，両親・弟の4人家族

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
中2のときに肩を痛めて運動ができなくなり，9月から欠席が多くなる。10月下旬から別室登校をするようになり，そのまま教室には戻らず卒業した。肩を痛めたことが不登校の原因とは思わない。学校に行けない理由が本人自身もよくわからず，ずいぶん悩んだ。
- 2 中学校時の支援
教室にいるのがつらくなると別室登校という形をとり，各教科担任が学習指導を行った。体を動かすことや同級生との活動を，学校が大切にし，放課後，野球部の練習に参加することを認めてくれたため，中3の夏の大会まで続けた。
- 3 選択した進路と現在の状況
別室登校から進学できるか不安だったが，先生からの情報で高校を選択できたことはうれしかった。私立高校普通科に進学。9月から欠席し，高1の12月に中退。通信制高校に編入した。週に2日登校するコースを選択したが，高2より週に5日登校するコースに変更した。高3の現在，順調に登校し，進学を目指して予備校にも通っている。
- 4 卒業後の支援
最初に在籍した私立高校では，進路変更の際に親身になって相談にのってくれ，情報提供をしてくれた。
- 5 考察（よかった支援，あつたらよかった支援）
本人は，中学校，私立高校，通信制高校の対応にととても感謝しているという。また高1での進路変更の際して両親の理解が得られたことに強く感謝している。
本人の学力が高かったため，別室での学習指導が有効に働いた。学力を保証していくことは学校にとって大事な役割である。
学校に行けない理由が自分自身よくわからずに悩んだが，今現在，通信制高校に通い，少人数での授業を受けてみて，「自分は集団になじめなかったんだ」ということがやっとわかったという。「集団のサイズ」が大きな意味をもつ場合があることを示している。

実例3 全日制高校退学後，中学校時の担任に相談し，進路変更をしたケース

16歳（高1）の女子，両親・弟の4人家族

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
きっかけは不明だが，中1の12月頃から欠席が始まり，3学期に入るとほとんど登校できなくなった。昼頃に登校したこともある。家庭も経済的に厳しい状態。家庭訪問しても本人はベッドから起きてこなかった。
- 2 中学校時の支援
担任・学年主任による家庭訪問。時々登校する。2年時のクラス替えでは，面倒見の良い友人を同じクラスにするなど，配慮した。クラス替えをきっかけに4月より登校開始。その後，クラスでの友人もでき，順調に学校生活を送った。
- 3 選択した進路と現在の状況
自宅から10分ほどの全日制高校へ進学したが，クラスの女子が少数のため，友人を作れず，高1の6月末より欠席が始まり，再び不登校。7月頃，高校の担任より中学に連絡。2学期中退。1月，本人より中学時の担任に，定時制高校への編入準備の話があった。現在，昼はアルバイト，夜は公立の定時制高校に通学中。
- 4 卒業後の支援
最初に在籍した高校の担任から「学校に来なくなった」という連絡が，中学校にあり，元担任が家庭訪問をしたが，すでに中1の不登校の頃のように布団から出てこなくなっていた。高校の担任も欠席が始まってから家庭訪問等をしたようだが，効果はなかった。
- 5 考察（よかった支援，あつたらよかった支援）
高校ではもっと早い時点で，本人の気持ちに寄り添って話を聞けたらよかった。しかし，その後，中学校の元担任に連絡を取り，本人の気持ちを受け止め，見守れる体制ができたことはよかった。

実例 4 集団が苦手な、通信制高校に籍を移したケース

17歳の男子，両親・姉の4人家族

1 不登校のきっかけ，その当時の様子

中1の頃，部活動でいじわるをされたことがきっかけとなり不登校となった。元々人間関係づくりが苦手な子で，学校でもおとなしかった。中2の9月から教育支援センターに通級し，学校では，スクールカウンセラーのもとに週1回程度通っていた。

2 中学校時の支援

本人の話をよく聞き，部活動での人間関係の改善に努めたが，両親とも相談し，部活動を休部することになった。その後も教室に戻れなかった。学校の相談室では，スクールカウンセラーや教員とはかかわりを持つことができた。

3 選択した進路と現在の状況

本人は，高校進学への意志が強く，勉強も頑張り，私立高校に合格した。私立高校に入学し，数日通ったが，集団の中に入れないという気持ちが強くなった。通学バスに乗ることができなくなり，1年生の途中で退学した。その後，通信制高校に編入した。

4 卒業後の支援

初めに在籍した高校の先生方も相談にのってくれたが，登校には至らなかった。

5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）

同じ年齢の友だちとかかわることが出来なかった。そのようなかかわりが持てる支援があるとよかった。

中学校までは，相談機関や教育支援センターなどのサポートがあったが，高校生や青年層の集うサークルや支援機関があるとよい。

実例 5 医療機関にかかりながら，中学時の養護教諭や教育支援センターが支えたケース

16歳の女子，両親・兄の4人家族

1 不登校のきっかけ，その当時の様子

中2の5月から，隣の席の女子をうるさく感じていた。本人が欠席したある日，その女子に悪口を言いふらされ，その後，保健室登校が始まり，中2の秋くらいからリストカットも始まった。登校途中にリストカットを行い，朝から保健室で手当を受けることも多かった。中3になって，その女子とまた隣の席になり，先生に替えてくれるように頼んだが改善されず，不登校になった。

2 中学校時の支援

中3の7月から，教育支援センターにつながった。

3 選択した進路と現在の状況

始めは県立高校への進学を希望していたが，自信をなくしかけていた頃に，教育支援センターの相談から通信制高校へ行くことを決めた。現在も登校を続けている。

4 卒業後の支援

リストカットをするなど不安定だが，医療機関につながっている。中学時代の友人を通じて，中学校の養護教諭や教育支援センターに相談が入る。在籍している高校が大変面倒見がよい。

5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）

中学校では担任の先生の教育相談的なかかわりや，スクールカウンセラーによるカウンセリングなどが受けられるとよかった。

保健室で養護教諭がリストカットの手当てとともに，本人の支えになったことが推察される。担任以外にも本人と関係がとれる教職員がいると子どもにとって救いとなるだろう。

実例6 医療機関につながっていたことで、本人に合った進学先を選択できたケース

16歳（高1）の女子，母親と義理の父・弟・祖母・伯母の6人家族 【準要保護】

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
家庭環境が複雑なことから，小5頃から保健室や相談室にしばしば通った。家庭では，経済的に苦勞し，家庭内が落ち着かなかった。中学入学後もリストカット，過呼吸などが起こっていた。
- 2 中学校時の支援
小学校から中学校へは，担当者レベルでの引継ぎがあったので連携がうまくいった。主治医の勧めもあり，学校は市の教育支援センターへの通級を考えたが，うまくいかなかった。その後，児童精神科のある病院へ転院した。本人も保護者も進学は無理だろうとあきらめていたが，医師から自宅から通える定時制高校を勧められ，高校への進学も出来た。病院とつながっていたことで，病院のソーシャルワーカーによるサポートも受けられ，精神的なサポートばかりでなく福祉的なサポートも受けられた。
- 3 選択した進路と現在の状況
定時制高校に進学し，3週間に1回の割合で通院中。学校でもパニック状態になったり友達とのトラブルなどもあったりしたが，担任も理解があり，養護教諭や学年主任のサポートも受けられて何とかやっている。
- 4 卒業後の支援
高校のスクールカウンセラーと定期的に面接している。本人は「病院のカウンセラーは予定がいっぱいだから学校でカウンセリングを受けるようにした。」と言っているが，病院と学校で連携を取っているのではないかと思われる。
- 5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）
病院につながられた事が良かった。定時制高校でも，病院と連携がとれているらしく，学年主任，スクールカウンセラー，保健室などで十分にケアされている。

実例7 反社会的行為等を繰り返した後，職場で彼氏と出会い安定してきたケース

16才の女子，曾祖父・祖父母・叔母の5人家族

母親は未婚で本人を生み，すぐ育児放棄をしたため，祖父母の養子として引き取られた。

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
原因は不明だが，小学校高学年から，さみだれ登校が始まった。中学では卓球部に入り，顧問の先生がよく面倒をみてくれたため，練習にも熱心に参加していた。しかし，中2になり，顧問の先生の転勤や，部活の友だちとのトラブルから，ぱったり部活動に行けなくなった。勉強は中1からわからなくなっていた。学校に行けなくなると携帯依存症になり，チャットで知り合った中3の暴走族の男子と仲良くなり，メール交換をするようになった。
- 2 中学校時の支援
中1から中3まで，どの担任もよく家庭訪問をした。本人が学校外で問題を起こしたとき，そのたびに警察や児童相談所等にも足を運んで対応した。学校が相談したため，指導主事と教育支援センターの相談員が本人と祖母と面接を行い，教育支援センターにつながった。
- 3 選択した進路と現在の状況
本人は「デザイン関係の専門学校に行きたい」と言っていたが，授業料が高いことから祖母に反対され，ビルの清掃の仕事をしている。彼氏も同じ職場である。
- 4 卒業後の支援
本人が暴行事件を起こし，現在保護観察中。彼氏も現在保護観察中。
- 5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）
中学校時代の教員の熱心な対応は，本人や不安を抱えた祖母にとって，大きな支えとなったと推察される。中学卒業後は，彼氏との出会いが仕事を続ける励みになっていたようであるが，生活は不安定である。祖母は今でも，ストレスがたまったり，判断に困ったりしたときには教育支援センターを頼ってきており，中学校時代に地元の機関とつながった意義は大きい。

実例 8 中学卒業後の進路が定まらず、遊び歩いているケース

16歳の男子，母・兄の3人家族

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
中2の時，所属していた部活動の先輩とのトラブルから登校をしぶり，中3ではさみだれ登校が続いた。家庭も経済的に厳しく，勉強も苦手な進学という進路選択は当初から本人にはなかった。
- 2 中学校時の支援
中2の2学期時の欠席が増え始めた頃に，担任が家庭訪問をし，本人の気持ちを聞いた。別室登校でもよいから登校するように誘うと，時々登校するようになった。しかし，登校しても無気力で何をどうするという事もなく過ごしていた。
- 3 選択した進路と現在の状況
当初から就職希望。母親の知人の紹介で，町内の小さな会社に就職した。4月より1・2回出勤したのみで，その後はブラブラと遊び歩いている。生活リズムも昼夜逆転し，母親も心配しているが，何も出来ない状態。
- 4 卒業後の支援
在学中は中学校としてもできるだけ本人に働きかけたが，進路先の決定にもかかわっていなかったため，卒業後の支援が何も出来ないのが現状。保護者は，困っていても本人に強く働きかけることが出来ず，本人自身は困っているわけではないので相談には行かない。
- 5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）
中学校で学習や進路指導，心の悩みの相談相手がいればよかった。中学校卒業後も悩みや仕事先の相談にのってくれる人がいればよかった。

実例 9 児相や中学校が家庭訪問等で支え，卒業後は地域の保健師が支えているケース

17歳の女子，父親（無職）・兄・姉・弟・甥（1歳）の6人家族 【生活保護家庭】

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
家族が不安定な状況，父親の養育拒否。兄弟も一人ひとりが勝手にバラバラ。学校の中でも人間関係がうまく作れず，教室に入りづらかった。
- 2 中学校時の支援
頻りに家に迎えに来てくれたり，学校に行っては別室（当時は会議室）で個別に学習することを認めてくれていた。家庭も大変な時期（兄が家を出て，姉は出産して子連れで居候，本人が家事全般をやらなければならなかった）で，学校の先生方や児童相談所のカウンセラーによく話を聞いてもらい，助かった。学校外部の人なので家庭内のことをよく話せ，安心できた。
- 3 選択した進路と現在の状況
定時制で働きながら勉強したかったが，人間関係がうまく作れず，定時制を中退した。辞めたことでホッとした。現在は，家の近くのコンビニでアルバイトをしながら，将来のことを考え，仕事の資格を取りたいと思っている。父親は生活保護の生活をし，生活保護の減額を恐れ，家族が働くことに反対している。
- 4 卒業後の支援
地域の保健師が，次女と赤ん坊の指導と共に，本人の相談にのっている。
- 5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）
教育支援センターが遠方だったため，学校の会議室を使った別室登校を活用した。今回の事例では，児童相談所も積極的にかかわってくれた。特に，児童相談所のカウンセラーはフットワークがよく，本人も信頼していた。しかし，中学卒業後は，つながりは途絶えてしまった。
現在は，地域の保健師が家庭を巡回し，直接指導をしている。また，中学校の養護教諭が時々連絡をとっていることで，本人の気持ちの支えになっていると考えられる。

**実例10 ひきこもりをしながら自分探しをし、ギターの弾き語りやアルバイトを始め、
自分自身で歩き始めたケース**

17歳の男子，両親・姉の4人家族

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
小学校からやっていた課外活動の延長で中1の時には部活に入っていたが，自分の運動能力の限界を感じた。また同じ頃，課外活動でコーチをしていた父親のトラブルが発覚し，身近な人間が信じられなくなり，学校も怖くなった。中2の時は教育支援センターへ行ったが，中2の3学期に「もうセンターには行かない。学校へ行く。」と宣言し，学校へ復帰した。
- 2 中学校時の支援
中学校の担任による家庭訪問などの後，教育支援センターへ行き始めた。本人は当時を振り返り，「特に先生の対応が悪かったわけではない。教育支援センターでは安心感を感じることができた。」という。
- 3 選択した進路と現在の状況
教育支援センターへ時折顔を見せていた先生が勤める高校へ進学したが，入学後2ヶ月で不登校。以降休学し，食堂で仕事をしたが続かず，高校も退学し，ひきこもり状態になった。その後，趣味のギターを街角で弾き語りをするうちに彼女も出来，少しずつ将来の事も考えられるようになってきた。最近では，自費でCDを出したりアルバイトをしたりと，色々と試行錯誤している。「人に夢を与えられるようになりたい」と，本人は前向きである。
- 4 卒業後の支援
なし
- 5 考察（よかった支援，あつたらよかった支援）
中学校の対応は悪くはなかった。何をしてもらってもどうしようもない時であった。当時を振り返り，本人は「特別扱いでなく，時間をかけて温かい目で受け止めて欲しいと思った。」と言っている。現在は，彼女ができて心の支えができたようだ。将来の仕事については自分なりのビジョンを持ち，一つ一つ積み上げていこうとしている。

実例11 1年間自宅でひきこもり，運転免許取得をきっかけにアルバイトを始めたケース

18歳の男子，母親との2人家族

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
自分は直接関係なかったが，仲の良い友人に対する中学校の先生の対応が許せなかった。もともと勉強が嫌いだったので，学校なんてどうでも良いと思った。でも，その時は，友人が崩れていくのをかばってやれるのは自分しかいないという気持ちだった。
- 2 中学校時の支援
なし
- 3 選択した進路と現在の状況
勉強が嫌いだったので，アルバイトをしようと思ったが，親が専門学校の話を持ってきた。興味のある自動車関係の学校だったので，とりあえず行ってみようかなと思って進学した。専門学校は，3ヶ月で中退。中学時代の友人とも疎遠になり，約1年間は自宅でひきこもり生活。夜遊びや悪いことをしなくなったから家族とは良い関係になった。原付の免許を取得。その免許を利用して宅配のアルバイトを始めた。1年間でアルバイト先がかなり変わったが，18歳になってから，現在の雑貨を扱う店のアルバイトは継続している。
- 4 卒業後の支援
なし
- 5 考察（よかった支援，あつたらよかった支援）
中学校時は学校への反発が強く，何をやってもはねつける状況だったが，学校外等で本人の気持ちをわかってくれる人がいたり，支援があつたら成長を促進できたかもしれない。中学の先生は，生徒が卒業してしまうと関係が切れてしまうが，卒業後1～2年くらいつながっていく人や機関の必要性を感じる。

実例12 中核地域生活支援センターや地域ボランティアに支えられたケース

18歳の男性，両親・弟・妹の5人家族

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
小5より不登校。友人関係のもつれ。もともとおとなしい性格で，ものごとを内向的に捉えるところがあった。
- 2 中学校時の支援
ほとんどなかった。教育支援センターにも行ったが，雰囲気嫌だったので一度しか行かなかった。
- 3 選択した進路と現在の状況
通信制の高校であれば，他者とかかわることがないだろうと思い，通信制高校へ進学したが，友人関係がうまくいかないため途中で退学した。現在は就労支援施設を利用中である。
- 4 卒業後の支援
自ら教育相談センターへ就職の相談に行った。そこで話を聞いてもらい，中核地域生活支援センターを紹介され，定期的に来所・訪問等で支援を受けている。同時に就労支援施設も継続利用するようになり就労に向けて頑張っている。
- 5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）
高校退学後，家にひきこもっていたが，突然就職しなければと思い立った。最初にどこへ相談に行ってもよいかわからず，地域の教育相談センターに行った。そこから，中核地域支援センターを紹介されたことで，その後につながった。現在の支援を受けているのは，「この時のきめ細かい対応があったからだと思う。」と，本人が話している。中学校でも高校でも，本人が望んだ時に，じっくり話を聴いてかかわれる存在が必要である。

実例13 親の希望で公立高校に進学したが，入学式だけ出席して退学してしまったケース

15歳の男子，両親・祖母・兄の5人家族

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
小4～5の頃は，担任が毎日迎えに行き登校していたが，小6になり担任が替わってからは不登校となった。中学校入学後は，しばらく登校していたが，5月になって部活動内の友だちとトラブルになり，学校に行けなくなった。部屋に閉じこもり，暴れることもあった。教育支援センターでは，キレやすく，カッとなると外に飛び出してしまうことが多くみられた。本人は，外に飛び出すことで，自分の気持ちを変えて冷静になろうとして自分をコントロールしていた様子だった。
- 2 中学校時の支援
中1から教育支援センターに通級するようになった。進学できる場所を探し，中学校として保護者に紹介した
- 3 選択した進路と現在の状況
本人は積極的な進学希望ではなかったが保護者の希望で，市内の公立高校に進学した。しかし，入学式だけ出席で，その後5月末に退学した。高校としても援助しようとかかわりを持ってくれ，転学も勧めてくれたが，本人は断り自主退学となった。本人は，「みんなが仲間で固まっている。その中に入れたい。入り方がわからない。」と言っていた。現在は，父親の会社で働き始めた。兄も一緒に働いており，家族が共に働いているので満足している。
- 4 卒業後の支援
中学を卒業しても教育支援センターの指導員に相談した。
- 5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）
義務教育後の相談機関が限られている。今回は，教育支援センターの指導員に相談があったが，本人や保護者が相談できる場所やシステムがはっきりしているとよい。中学校の進路指導では，本人の希望や要請に合った支援が大事な視点である。

実例14 家庭環境が複雑で、中学の養護教諭から家庭相談員に支援がつながったケース

16歳の女子，母親は二度の離婚をし，小学校中学年から，姉夫婦・弟と同居

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
中3の進級時にクラス替えがあり，女子の集団にうまく適応できなかったことで，大幅な遅刻をするようになった。すでに母親が家を出てしまっており，深夜まで起きているため，本人が朝起きられず遅刻が多くなった。同学年の生徒と顔を合わせることを嫌った。
- 2 中学校時の支援
担任や養護教諭が電話し，昼頃登校し，保健室で話をしたり，ドリルの学習をして過ごした。たくさんの先生が自分のことを心配してくれたことは感謝している。学校の職員だけでなく，スクールサポーター，訪問相談担当教員，健康福祉センターの家庭相談員など，たくさんの人が話を聞いてくれた。
- 3 選択した進路と現在の状況
定時制高校に進学したが，すぐに辞めた。本人は，勉強が嫌いなのでどこを選択してもいずれは辞めると思っていた。その後は，母親の知人の紹介でパン屋でアルバイトをしている。給料からは，2万円を母に渡している。18歳になったら，居酒屋で働きたい。
- 4 卒業後の支援
卒業後も中学校へ相談に訪れた。現在は，健康福祉センターの職員が相談に乗っている。
- 5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）
家庭環境が複雑なケース。親でなければ，養育できない面が多分にある。卒業後は，中学校の職員が心の支えとなったが，立場上，直接支援することができなかった。中学を卒業しても，安心して自分を語れ，相談できる場所（健康福祉センター等）を活用した例である。

実例15 中学で支援が受けられず，支援センターや地域ボランティアに支えられたケース

21才の男子，妻（21才）と長男（0才）の3人家族

母子家庭で，家庭環境が複雑な家庭で育った。

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
小学校の頃から不登校傾向があった。中2のとき通っていた中学校では，不登校傾向がある上，近所の車をいたずらしたり，暴力事件を起こしたりという問題を起こしており，「手におえない生徒」というレッテルを貼られていた。転居のため，中3になり転校。転校した学校へは1日も通学しなかった。
- 2 中学校時の支援
中3時に転校した学校では，教室に机がなく，転入生がいるということも生徒達に知らされていなかった。地域を見守る主任児童委員がその事実気づき，家庭訪問を行って母親の相談にのり，そこから，本人は教育支援センターに通うようになった。
- 3 選択した進路と現在の状況
母親の大変さを考え，家の手伝いをすることにしたが，翌年に「高校を受験したい」と考え，県立高校を受験したが不合格。その後，伯父の八百屋のアルバイトをしていた。「どうしても高校卒業の資格をとりたい」と，定時制高校を受験して合格し，順調に通学していたが，中学時代からつきあっていた女の子が妊娠したため，高校を中退し結婚した。アルバイトの収入だけでは生活が苦しく，家賃が払えなくなり，安い所に引っ越す。「母に迷惑をかけたくない」と思いながら，お金に困ると人を介して母に頼っている。
- 4 卒業後の支援
地域のボランティアで教育支援センターに協力している人に，困ったことがあると相談している。教育支援センターの指導員や市教育委員会指導主事から母親へ連絡をする。
- 5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）
中学校の対応も様々であるので，学校内外の人によるチェックは必要である。教育支援センターにつながったことで，本人は相談できる人ができ，今でも力になっている。今後は，福祉的なサポートが必要であると考えられる。

実例16 家庭が不安定なため、本人が情緒的に混乱したケース

16才の女子，本人が中学生のときに両親は離婚，父親と同居。父親と本人の仲は悪い。

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
中学生になり両親が離婚。父親に引き取られ，その後，不登校になる。家でヒップホップ系の音楽を聞いたり，雑誌を読んだり，アニメのイラストを描いたりして過ごしていた。
- 2 中学校時の支援
地域の保護者から「学校に行っていない中学生の女の子がいる」という連絡が市の福祉課の家庭相談員に入り，相談員の紹介で教育支援センターにつながった。
- 3 選択した進路と現在の状況
高校に合格した直後に母親が自殺した。その後，本人が不登校になった。本人は不安定になり，友人に「SOS」のメールを送った。心配した友人が自分の母親に相談し，病院に連れて行ったところ，「抑うつ状態」と診断された。父親は「本人はそういう診断名を受けてさぼっているだけだ」という言い方をして，受け入れない。本人が家には帰りたがらず，そのまま友人の家で居候している。
- 4 卒業後の支援
市の家庭相談員がかかわっている。
- 5 考察（よかった支援，あつたらよかった支援）
中学校では，積極的な温かい働きかけがほしかった。援助が必要でありながら，専門機関になかなかつながらず介入できない場合，このような「地域の力」は大変に心強い。
家庭相談員は，現在もかかわっており，貴重な存在である。保護者にどうにかしようという考えがない場合，周囲はどこまでかかわっていけばよいのか，複数の人や機関で対策を練る必要がある。

実例17 卒業後，外部機関等の支援が切れてしまったケース

17歳の女子，母親（パート）・妹・姉夫婦と子どもの6人家族。 【準要保護】

- 1 不登校のきっかけ，その当時の様子
もともと生活習慣が整っていなかったため遅刻は多かった。中2の時の校外学習で，友人と同じ班になれなかったことをきっかけに友人との距離ができてしまった。しだいに服装や行動が派手になり欠席が増えていった。友人との関係が切れてしまい，学校へ来る気力がなくなってしまった様子。
- 2 中学校時の支援
家庭訪問をしたり，登校や部活の時間に迎えに行ったり，養護教諭や担任が話し相手になったりして，完全な不登校にならないようにかかわった。母親とも面談し生活習慣を整えるよう依頼したが，難しかった。
- 3 選択した進路と現在の状況
学費のこともあり定時制高校に進学。中学校としては，在宅になるよりは社会とつながっていられるとの判断で，本人を励ましながら何とか進学させた。しかし，高校で知り合った友人とのつながりで，グループで夜になると遊びまわるようになり，飲酒や喫煙もあった様子。2年で中退する。
- 4 卒業後の支援
なし
- 5 考察（よかった支援，あつたらよかった支援）
家族を含めた自立のためのサポートが必要だと思われる。
外部機関との連携を探したがどこもつなげなかった。中学校時代から，保健センターや市の福祉課等の福祉機関がかかわってくれるような連携が取れると良かった。

実例18 家庭要因があり、生活の基盤を築くのが困難だったケース

16才の女子，父・兄の3人家族。父親は多額の借金を抱え，仕事に一生懸命であるが，家庭のことはなにもしない。

1 不登校のきっかけ，その当時の様子

中学入学当初から，生活が不規則になり，遅刻が多くなった。また，肥満のため，動作も緩慢。学校では，いじめにあうなどして欠席も増えていった。

2 中学校時の支援

担任は非常に熱心であり，夜でも家庭訪問を行った。また，学用品だけでなく，衣類も特別なサイズであったが，自腹で買い与えていた。教育支援センターには，中2の3学期より通級した。中3の3学期からは通常学級に戻ったが，登校状態は不安定であった。教育支援センターで仲間いじめをされることもあったが，そういう刺激を受け入れられないように振る舞っていた。

3 選択した進路と現在の状況

定時制高校に入学したが，入学式のみ登校しただけだった。授業料は未納。退学手続きはないので籍はまだある（調査当時）。本人は，ダンスが好きで，芸能人や医者になりたいという希望も持っていた。

4 卒業後の支援

なし

5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）

家庭の状況が変わっていったら，登校できていたように思う。中学校段階で市の福祉行政と連携することができなかったか。

高校に進学したが，入学式だけしか出席していない。進路選択の際に本人の状況や気持ちに寄り添い，十分な準備をして進学できるような支援を検討したい。

実例19 家庭や学校に居場所を見つけられず，異性に頼り生活しているケース

17歳の女子，祖母・両親・姉・兄・妹 7人家族

1 不登校のきっかけ，その当時の様子

中1の2学期より登校しぶり。部活動で3年生引退後，顧問が本人の学年の指導を中心にやり始めた頃から，顧問の強い指導を受け入れられなくなった。中3は部活顧問が，担任になり，担任の厳しい指導に反発するようになり不登校。中3の7月頃より教育支援センターへ通所。

2 中学校時の支援

担任でもある部活顧問への反発が激しいため，本人の指導にかかわらないほうが良いと校長が判断し，以降，学年主任と養護教諭がずっと対応に当たった。ただし，この対応については家庭側には知らされなかったため，本人・保護者とも冷たい担任だと思っていた。家出の際には学年主任が対応，家庭訪問などは養護教諭が対応していた。教育支援センターではよく話をして，本人も泣きながら話をしていたこともある。

3 選択した進路と現在の状況

本人は家を出ることを最優先で希望していた。フリースクールや通信制高校も勧めたが，高校中退した兄を見ていてその気はなく，学校が勧めた就職先も断り，未定のまま卒業した。現在は，家を離れ，同棲しているらしい。

4 卒業後の支援

本人も家庭も支援の必要性を認識してくれず，何も出来ない状態。

5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）

教育支援センターには居場所を感じていた彼女を見るにつけ，中学卒業後の年齢でも相談にのったり，対応が出来たりする場所があったらよかったと思う。

実例20 生きていくための生活基盤が保障されなかったケース

16歳の女子，中1の時に両親が離婚し，父親に引き取られたがうまくいかず，その後，父親の家を出て，母の実家で祖母と2人で生活。

1 不登校のきっかけ，その当時の様子

両親の離婚により保健室登校や別室登校が増えた。親権争いの裁判後，不登校となった。その後，母親の実家で祖母と2人で暮らすようになった。当時は自分の部屋にポータブルトイレを持ち込むまでのひきこもり状態になった。1年ほどで解消し，担任と訪問相談担当教員が家庭訪問をすると，居間で話をするようになった。しかし，母親の実家が中学校から遠いため，登校が困難な状態であった。中3の秋に祖母が亡くなってからは，本人がそこで1人で暮らすようになった。食事は母親の差し入れるカップラーメンやパンが主なものだった。母親は本人を引き取るとは言っていたが，実行される気配はなかった。

2 中学校時の支援

本人に対して，担任・訪問相談担当教員が家庭訪問を行った。「高校にはどうしても進学したい」という本人の思いがあったため，学校はその気持ちを大切に支援をした。母親に対しては，教頭，教育委員会，福祉課が何度か話し合いをした。福祉課や児童相談所も熱心に取り組んだが，福祉課の介入を家族が望んでいなかったことが壁になった。関係機関で会議を開いたりしたが，具体的な支援の方法が見つからなかった。

3 選択した進路と現在の状況

定時制高校に進学したら，母親が何度か学校まで送ったが，その後は行けなくなった。登校した時は，教室に入れず保健室登校になり，養護教諭が面倒をみた。

4 卒業後の支援

母親に引き取る様子がなく，母親の実家のある市の福祉課に引継を行った。

5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）

本人が一人でも生きていけるような，じっくりとかかわることができるサポート機関があると良い。また，本人や保護者の直接の訴えがなくても，深くかかわることができる関係機関があれば良いのではないだろうか。食事や家はあるが，そこで何とか生きていけるだけの精神的基盤のないギリギリの子どもが，周囲の記憶から消えてしまう心配がある。

実例21 家族共々，自立のための支援が必要だったケース

18歳の男子，母親・弟・義理の父4人家族 【生活保護家庭】

1 不登校のきっかけ，その当時の様子

生活が乱れ，遅刻が増えてきて，ずるずるの不登校状態になった。そばによると臭いがする状態で，友達も距離を置くようになってきたこともきっかけと思われた。母親は定職に就いていないので，経済的にも苦しく，家族共々生活が乱れていた。食事もしっかりと取らず，洗濯もめったにしない，風呂もほとんど入っていない状態だった。

2 中学校時の支援

学校にも，家庭にも居場所が無くなっていた本人に，教育支援センターを紹介し，休みなく通級していたので，やっと本人の居場所ができたという点では良かった。しかし，結局，不登校の問題だけでなく本人の送迎や食事など生活面まで依存していくようになってしまった。

3 選択した進路と現在の状況

定時制高校に進学したが，5月で学校へ行かなくなり退学した。学費の問題も大きかった様子。本人はアルバイトをして学校を続けるほどの力はなかった。退学後は在家庭。ただし，ひきこもりの状態ではなく，買い物に出かけるなど，近所に出ることはできる。

4 卒業後の支援

高校退学に関して，中学や教育支援センターには相談がなかったため，その後の支援は受けていない。

5 考察（よかった支援，あったらよかった支援）

かわいそうだからという気持ちで支援して，結果として依存を助長してしまった。家族共々自立を促す支援が必要だった。

実例22 家族の介護をしながら就職（パート）したが、長続きしなかったケース

17歳の女子，両親，姉，弟の5人家族

1 不登校のきっかけ，その当時の様子

姉も母親（難病）の介護にかかわっていたが，姉が体調を崩したことをきっかけで，本人が母親の世話をするようになった。朝，母親のオムツを替えてから登校していたが，母親の病状が進み，時間通りに済まなくなったり，母親が「そばにいて欲しい」と言ったりしたため，遅刻したり，休みがちになったりしていった。また，登校すれば学級に入り，友人もいたが，欠席が多くなるにしたがって友人ともケンカをしたり，思い通りにならないとイライラして学校から離れていくようになった。

2 中学校時の支援

登校しない日は，必ず電話を入れたり，欠席が続くときは友だちが迎えに行ったりしていた。本人の相談にもものっていたが，保護者が「忙しい，忙しい」と言い，なかなか学校としてもかかわることができなかった。

3 選択した進路と現在の状況

「勉強が嫌いだから高校へは行かない」と言って，自分で探してきた職場に就職したが，スーパーのパートは1ヶ月も続かなかった。その後，何度か職を替えたが，確かな情報もなく，中学校も卒業後のことは把握していない。最終的には，結婚をすると九州へ行ってしまった。

4 卒業後の支援

なし

5 考察（よかった支援，あつたらよかった支援）

就職を希望する子どもに，確かな就職先をサポートできないものか。家庭に教育力がない子どもにこそ必要なサポートだと考える。就職が決まらない場合は，中学卒業の子どもが行ける職業訓練的な公的機関につながっていれば，すぐに社会に出なくても良いのではないか。

家族の介護については，福祉的サービスが利用できないか，検討する必要がある。

実例23 経済的理由から，卒業後も自宅で小さな弟の面倒をみて過ごしているケース

15歳の男子，両親・兄・妹・弟（2歳）の6人家族

1 不登校のきっかけ，その当時の様子

家庭の金銭的な事情から一家で引っ越してきたが，弟を保育園に預けることができずに，本人が面倒を見ることになり，登校できなかった。本人も特に学校に行きたいという気持ちもあまりなく，学校や関係機関が保護者に働きかけても進展がなかった。妹が登校してからは，本人と弟と2人で過ごしている。

2 中学校時の支援

担任や管理職は，現状の改善に向けて保護者と話し合いを持とうと何度も家庭に働きかけたが，応じようとしなかった。担任が家庭訪問すると，本人と会って話すことはできた。中学校からの要請で訪問相談担当教員がかかわるようになり，定期的に週一度の家庭訪問をしたり，時々弟と妹を連れて放課後に登校して，職員と話せるようになっていった。

3 選択した進路と現在の状況

在宅中である。中学校時と同じように，小さな弟の面倒を見ている。本人は弟や妹の面倒を見るのが自分の役割だと思っている様子。

4 卒業後の支援

本人は，外へ出てアルバイトをしてみたいと思っており，現在は，兄が勤めている会社でアルバイトができるとよいと思っている。

5 考察（よかった支援，あつたらよかった支援）

本人は，担任や訪問相談担当教員が家庭訪問をしたことについて感謝している。訪問を継続したことで，学校とも様々な面につながっていた。

生活保護を受けていないが，民生委員や教育委員会，市役所福祉課が連携を図りながら，対応できたらよいケースだった。

4 キーワードの整理

キーワード 【高校の教育相談体制の充実】 【中高における情報の共有】

上述の23件の事例のうち17件が、義務教育後の進路として進学を選択し、全日制高校や定時制高校や専門学校へ進学した。しかし、そのうちの15件は、入学後数日から数ヶ月の間に登校できない状態になり、退学していた。

最初に在籍した高校や専門学校を退学した15件のうち、別の高校やサポート校に進路変更することによって、新しく在籍した学校で適応できるようになった事例もあった。

事例1では、義務教育後、すぐに在籍した高校で「話を聞いてもらえる雰囲気ではなく、このまま普通に通学できないなら、進路変更をするように勧められたことがショックであった」が、サポート校に進路変更し、「サポート校では、先生方が熱心に話を聞いてくれたのでよかった」といい、また、事例2では、最初に在籍した高校について、「進路変更の際に親身になって相談にのってくれ、情報提供をしてくれた」という。さらに別の事例では、保健室での支援が本人を支えたというものもあり（事例5）、熱心に話を聞いてかかわってくれる存在が安心空間（前研究を参考のこと）となり、新しい環境での適応につながったのだと考える。

事例3は、全日制高校に進学したが、高1の1学期から登校できない状態になり、高校担任が中学校にその状況を連絡し、中学時の担任が本人の相談に応じることで進路変更し新しく在籍した高校で適応している事例である。上述のとおり、義務教育後に進学したが、入学後数日から数ヶ月の間に登校できない状態になっている事例では、進学先の教員との信頼関係を築く以前に不登校状態になっていると考える。信頼関係が築けている人に話を聞いてかかわってもらうことにより、進路変更という結論を出した事例では、その後の経過も良好であった。

以上のことから、「高校の教育相談体制の充実」と「中高における情報の共有」が、中学校時に不登校を経験した生徒を支援していくうえで必要であるといえるだろう。

キーワード 【所属する集団の大きさ】 【集団に適応するためのスキル】

中学校時に不登校を経験した生徒の中には、対人関係に困難さを感じている場合も多く、事例2のように進学先として通信制高校やサポート校を選ぶケースや、事例4のようにいったんは全日制高校に進学したものの、大勢の中に入れないという気持ちが強くなり、通信制高校に編入したケースもある。事例13では、「みんなが仲間で固まっている。その中に入れられない。入り方がわからない。」といい、高校入学後すぐに不登校状態になっている。

以上のことから、中学校時に不登校を経験した生徒が進学先を決める場合、「所属する集団の大きさについての検討」をする必要があるといえるだろう。そして、「SST（ソーシャルスキルトレーニング）などによる集団に適応するためのスキルを身につけさせるような準備」も必要だと考える。

キーワード 【医療機関との連携】

義務教育後の進学から進路変更をせずに在籍し続けた事例5は、中3時の進学先を検討している段階で本人が自信を失いつつあった時に、通信制高校に関する説明を受け、それをきっかけに進学先を決定し、現在（調査当時）も順調に登校を続けているケースである。また、精神的疾病の治療のために医療機関にも通っており、このことが本人の安心感にもつながったと考える。また、事例6では、本人も保護者も進学をあきらめていたときに、精神的疾病の治療のためにつながっていた医療機関で、自宅から通学できる定時制高校を勧められ、精神的なサポートを得て進学先でも安定して在籍し続けたケースである。医療機関につながることによって、精神的なサポートだけでなく、ソーシャルワーカーによる金銭的な問題を解決するための情報などの道具的サポートも得て、本人や保護者の安心感を支えていたと推察できる。

身体的・精神的な不調が要因となっている不登校については、「医療機関との連携」が必要である。医療機関と連携することにより、身体的・精神的な不調の回復につながり、さらに、本人の安心感にもつながり、進学した学校での適応にもつながると考える。

キーワード 【反社会的行為の意味】 【信頼できる出会い】

事例の中には、反社会的な行動をしている場合もある。事例7は、信頼していた部活動の顧問の先生の転勤や友だちとのトラブルなど、人とのつながりをもてなくなったことから学校に行けなくなる。そして、自分とつながりをもてる人と、自分の存在を認めてもらえる居場所を学校の外に求め暴走族の仲間に入ることになる。この事例では、反社会的な行為として暴力行為があげられるが、事例15では、近所の車をいたずらしたり、暴力事件を起こしたりとさまざまである。どれもが社会的に許されるものではないが、友だち関係を大切にするあまり行動を共にするようになった事例もある(事例11)。

事例7では、顧問の先生が良く面倒を見てくれていたときは熱心に部活動に参加することができていた。事例11は、1年間自宅にひきこもって生活し、そのときに家族が温かく見守ったことでアルバイトを始める。事例15では、学校がかかわりを持たない中で主任児童委員が家庭訪問を行い相談にのることで、教育支援センターに通うようになった。

この3つの事例では、熱心にかかわりをもってくれた人達の存在が、彼らの行動をよりよい方向に変えていくことになったのではないだろうか。「信頼できる出会い」は、人を前向きに動かす原動力として非常に貴重なものであると考える。

キーワード 【学ぶ意欲や自立に向けた支援】

事例8・21は、家庭が経済的に厳しく、学習面でも関心を持たず、親しい友人もいない状態で、本人は何を希望に持てばよいかわからなくなり、進路の選択ができなくなってしまったケースである。

思春期を迎え、周りの状況と自分を比べて違っている点やこれからのことに不安を抱く時期である。この時期に適切な支援が必要になる。特に学習に対する支援をし、自分を高めていこうという意欲を持たせていくこと。さらに中学を卒業して、働くことのイメージや意義を育むことが必要とされる支援であろう。その支援を行う機関は、中学在学時は中学校であるが、卒業後にもそのような支援ができる場があるとよい。

「自分の好きなことを見つける」そして「やり始める」「やり続ける」ことで、将来に向

けて希望や意欲を持てるように、そして、自分を活かすものや場所があることで自信や自己肯定感を高めていくことが大切なのではないだろうか。

学校や関係機関もこのような視点を考慮しながらかわりを持ち、子ども達が自分の興味・関心のあることに気がついたり、発見したり、育てたりすることに支援・援助ができるとよいと考える。

キーワード 【就職の斡旋】

中学を卒業して就職を希望する場合に事例では、「親の知り合いを頼りに町内の小さな会社に就職」(事例8)「自分で就職先を見つける」(事例22)など、家庭で就職先を探している。また、進学したが途中で退学をして就職をした事例では、「近くのコンビニでアルバイト」(事例9)、「父親の会社で働く」(事例13)、「知人の紹介でパン工場でアルバイト」(事例14)、「伯父の八百屋でアルバイト」(事例15)など、これらも家庭や知人などを頼りに探している。これらの就職先は、自分の希望する職種を相談しながら決めたというより、働く場所があったのでそこで働き始めたと推測できる。そのために、長続きしないでやめる場合が多い。中学校卒業時には、就職の斡旋について、職業安定所は、学校を通して就職先を紹介しているが、あまり利用していない。これは、求人の数や受け入れをしてもらえるところが少ないことも考えられる。中学校卒業後、または高校中退後に働く場を提供する環境を整え、広報していくことが必要であると言える。また、まだ働くことが難しい場合には、就職の前段階として、働くことの意義を学んだり、その際に必要な技術を取得したり、就労に関する相談ができたりする機関の紹介なども併せてする必要がある。

キーワード 【家庭要因による不登校】 【関係機関との連携】 【社会的孤立】

「事例」を見ると、家庭環境が厳しいケースが多い。経済的に苦勞しているケース、家庭環境が複雑なケース、保護者の養育能力が低いケースなどである。家庭での生活が乱れて基本的な生活習慣が身につけていない場合、学習面でも苦手となることが多い。また、愛情に恵まれないと、人に対する安心感や信頼感が十分に育まなかったり、家庭の中で自分の居場所が見つけられなかったりするなど、子ども達にとって困難が大きい。そのため、よりよく生きようとするエネルギーや活動のエネルギーが失われてしまうこともある。こうした子ども達を支えていくために、周囲のサポートが必要になる。

ここでの事例を通して、中学校ではさまざまなサポートが行われていることがうかがわれる。また、教育支援センター(適応指導教室)でも熱心なかわりが持たれている。この時に、地元の福祉的機関や人につながった場合は、中学校卒業後も大切な支援資源として利用される可能性が高い(事例9・14・15・16など)。例えば、事例14では、登校した時に学校が、スクールサポーターや訪問相談員、保健福祉センターの家庭相談員など多くの方にかかわる機会をつくっている。この子には現在も保健福祉センターの職員が継続して相談にのっているということで、卒業後も頼りにできる人につなげた学校の役割は大きいと考える。本当に親身になって本人や家族にかかわっている学校や教師は多いが、卒業により、また教師の異動により関係が途切れてしまう(事例17・18・19など)。子どもの将来を考えた時に、特に家庭環境が厳しい場合は、小・中学校の時から関係機関につなぐ努力が必要である。そのために、コーディネーターの役割を果たす人が重要となる。例えば、各教育事務所に配属されている訪問相談担当教員や、中学校に導入されたスクールソーシャルワーカーなどの活

躍が期待される。

しかし、いくら学校が関係機関につなごうと尽力しても、それを受け入れない保護者もいる（実例 16・20・23 など）。実例 20 では、教頭・教育委員会・福祉課職員も父親と話し合いをもったが、事態は好転しなかった。それでも、福祉課がその事情を把握していることが大切である。また、この子にとって、周囲の多くの人が自分のことを心配して動いてくれた事実は、心の糧になると考える。この子自身が成長した時、こうした機関を利用できる力を身につけてほしい。

キーワード 【ひきこもることの意味】 【関係機関の横の連携】

家庭にある期間ひきこもり、それから活動を始める場合もある。「ひきこもり状態になった後、趣味のギターを街角で弾き語りをするうちに彼女も出来、少しずつ将来のことも考えられるようになってきた。」（実例 10）、「約 1 年間は自宅でひきこもり生活。自動車への興味は変わらず、原付の免許を取得。その免許を利用して宅配のアルバイトを始めた。」（実例 11）などは、ある一定期間、自宅にひきこもることを続けたケースである。しかし、この期間で、自分を見つめ直し、置かれた状況を冷静に判断できるようになることもある。自分探しの中で混乱したが、自分で立ち直り前向きに行動していこうという力が出てきたことは、この期間が意味のある時間だったと言える。

この時には、混乱する子どもを温かく見守り、本人が自分に自信を取り戻して次の方向性を見つける援助を家庭でできるかどうか、キーポイントになる。義務教育後の家庭を支える機関として、本センターの活用も考えられる。

家庭にひきこもり、エネルギーが蓄えられた後、就労を考える場合には、公共や民間の青少年支援機関や NPO 団体、福祉機関の存在が貴重になってくる。しかし、多くの場合、どんな機関があるのかを知らなかったり、どのように利用したらよいかわからなかったりする。実例 11 では、高校退学後、家にひきこもっていたが、突然就職しなければと思い立った。自ら教育相談センターへ就職の相談に行ったところ、中核地域生活支援センターを紹介され、定期的に来所・訪問等で支援を受けている。同時に就労支援施設も利用するようになり、就労に向けて努力している。

このことから、関係機関をいろいろな場所で広報していくとともに、相談を受けた時により適した関係機関を紹介できるように、横の連携を心がけていくことも必要であると考えられる。